

(Japanese Academy of Learning Disabilities)



# 日本LD学会会報

第46号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内

〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL.028-649-0090 FAX.649-1213

URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jald/>

## 学習面での著しい困難を示す子どもたち-4.5%

横浜市中部地域療育センター

原 仁

平成14年度に文部科学省が実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果に注目したい。特別な支援を必要としている児童生徒の割合の6.3%がよく引用されるが、個人的にはカテゴリーA (LDに相当) の4.5%の方が驚くべき数値と思う。

行動の問題であるADHDや高機能自閉症（以下HFA）の割合は、それぞれ2.5%、0.8%であった。予想の範囲の妥当な結果である。すなわち、ADHDは他の合併障害（反抗挑戦性障害など）を伴っていたり、極めて重度なADHDはこの程度であって、最大5-7%というDSM-IV-TR(2000)などの頻度は、軽症例を含んでの数値であろう。また、最近の広汎性発達障害の疫学調査の結果は、かつての調査よりもかなり高い数値を報告しているが、それでも1-2%であるので、その半数がHFAだとして、この調査の0.8%は納得できる。

発達障害を専門とする他の医師から、日々の臨床の中で、いわゆるディスレキシアと診断する例

に出会うことは極めてまれである、「LD」は本当に存在するのか、としばしばたずねられ、曖昧な答えにならざるを得なかった。それは、最近のLDの発生頻度の調査の大部分は1%未満を示すことがほとんどであったからでもある。

LDの研究に携わって感じたのは、LDの見えにくさと分かりにくさである。第一に、行動や情緒の障害がないLD児は、だれにも気づかれぬまま放置されていることがほとんどだった。親（多くは母親）の再三の訴えにもかかわらず、具体的な対応には至らない。逆に、担任が気づいても、親は気にしない場合もあった。第二に、ADHDやHFAの学習のつまづきを的確に捉えるのは意外と難しい。実際、本人ならびに同級生の安全をいかに確保し、いかに授業を成立させるかに日々悩まされている現場では、個人の学習の困難への対処は二の次になっている。しかし、4.5%という数値が意味するのは、十分に配慮された手順を踏めば、学習に困難を示している子どもたちの姿がはっきりと浮かび上がることなのだ。